

夕陽丘高校 100冊の本

# 夕陽丘の100冊

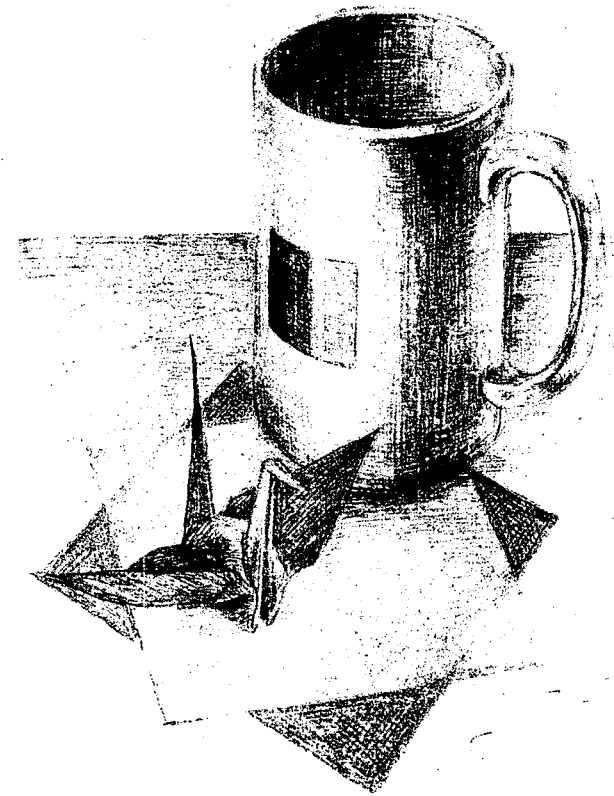
発行 2015年11月  
大阪府立夕陽丘高校図書館

1年 \_\_\_ 組 \_\_\_ 番

2年 \_\_\_ 組 \_\_\_ 番

3年 \_\_\_ 組 \_\_\_ 番

期 \_\_\_\_\_



第二版 2015年

## 「夕陽丘の100冊」第2版発行に当たって

(2015年11月)

2011年7月、夕陽丘高校図書館では、生徒諸君に在学中に読んでもらいたいと思う本100点と番外20点を選び、「夕陽丘高校 100冊の本」として推薦しました。さらにその11月には一冊ずつの内容紹介をした小冊子「夕陽丘の100冊」を生徒・職員に配布しました。

今年、4年ぶりにその新版を発行します。

この企画は、一冊でも多くの良書を読んでもらいたい、そのための道しるべを設置しようというものです。また番外の20点は、もっと気軽に読書を楽しみ、本に親しんでもらいたいとの思いから選びました。

今回の改訂に当たっては、各教科から委員の先生を選んでいただき、その先生を中心に本の推薦、紹介文の執筆を依頼しました。その結果、約4割の本が新しいものと入れ替わりました。生徒諸君にとってより親しみやすく、現代的な本を、との意図の反映です。学習に役立つ本、将来の進路や生き方について考えさせてくれる本から、教養として読んでおきたい名著名作、高校生の魂に響く青春小説まで、きわめて幅広く選んでいます。

㊦はマルユウマークといって、難易度の目安になっています。㊦一つが読みやすく、㊦二つは普通程度、三つは少々歯ごたえがある本です。番外20編は笑える本や、小学生から読まれているファンタジー、スポーツ物をはじめ、青春小説、ミステリーまで、愉しく読める本を揃えています。紹介する順は、図書館の分類法を参考に、内容で分けてみました。同一分野のものの中では、易しいものから難しいものへの順番になっています。

広大無辺に続く本の世界、そこに向かう君のために、この小冊子「夕陽丘の100冊」が読書の手ほどきをし、未知の土地へといざなうものになることを願っています。

大阪府立夕陽丘高校 図書館

(表紙の絵は美術部・大槻ひろかさん、カットは美術選択生徒の作品です)

### 《学問・哲学・心理学》

あさの あつこ編 『10代の本棚』 ㊦

13人の大人による読書案内。10代という多感な時期に、どんな本を読んでもどのような影響を受けたのか。本との出会いを大切にしたい一冊。

NHK制作チーム編 『テストの花道』 ㊦

“頭がよい”とはどういうこと？ テストで点を取るのに楽な方法はある？ 三日坊主から脱し、集中力をアップするには？ 目先のことにとらわれず、本当に学ぶ力を付けるための、分かり易いガイド本。

池谷 裕二 『受験脳の作り方』 ㊦㊦

脳は記憶を蓄えるよりも忘れていくほうが多い。試験前に徹夜で詰め込んだ記憶は、呆気なく消えていく。しかし、興味があるものはすぐに覚えられし、バイオリズムをつかめば記憶効率は上がる。脳の働きを正しく理解して、恐れず受験に挑む！ 気鋭の脳研究者が教える学習法。



大阪大学編 『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』 ㊦㊦㊦

副題は「越境する学問一穴からのぞく大学講義」。表題の難問に工学、美学、数学、歴史学…、各分野の先生が仮説を立てて、挑む。その議論は難解でも、それぞれの学問の奥深さと、考えることの大事さが判る。

池田 晶子 『14歳からの哲学』 ㊦㊦

中学生に向けて語る口調の〈考える〉の章から始まって、17歳から向けの〈宇宙と科学〉の章を経て、〈存在の謎〉へ。模範解答が書かれているわけではない、自分で「考えるための教科書」(副題)。

神谷 美恵子 『生きがいについて』 ㊦㊦㊦

人は時に、自分は何のために生きているのか、という問いを發する。ハン

セン病患者と長年接し、心の治癒に尽くした精神科医が、生きていくことについて、深い思索から生まれた言葉で力づけてくれる。

市川 伸一 『心理学って何だろう』 ㊦㊧  
イメージはもっているけど、本当のところがよく判ってない人が多い心理学という学問。心理学で人の心を読めたり、自分を変えたり出来るのだろうか。大学で心理学を学びたいと思ってる人にも役立ちます。

#### 《歴史》

齋藤 孝 『齋藤孝のざっくり！日本史』 ㊦  
日本史の中から現代の出来事に関係の深い事柄をピックアップし、ざっくり解説。「すごい！」と思えるネタがたくさんつまっていて、「日本っていいな～」とほっこり思える本。

池上 彰 『そうだったのか！現代史』 ㊦  
今に続く中東諸国の紛争、「ソ連」という国は何だったのか……。第二次世界大戦後の世界の出来事を理解する手がかりになる本。様々なことが複雑に絡み合う現代。歴史をさかのぼることで現代世界の背景が見えてきます。非常に読みやすくわかりやすい文章。

網野 善彦 『歴史を考えるヒント』 ㊦㊧  
(日本)という国号はいつから使われた？ 百姓とは農民のことでない、日本は農業社会というのは嘘！——新しい視点から日本史を大胆にとらえ直した歴史家が、連続講演の話をもとに、歴史の見方を平明に伝える。

加藤 陽子 『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』 ㊦㊧  
日清戦争から太平洋戦争までの歴史を、東大の先生が高校生に行った連続講義をまとめた本。内外の政治家・軍人から一般人まで、当時の人々はどのようにその時、そうしてしまったのかを、私たちに考えさせます。

カーランスキー 『塩の世界史』 ㊦㊧  
塩がないと人間は生きていけない。海から陸上に生活圏を移した生物の宿命として塩を求めての苦労が歴史を彩ってきた。巨大な利益をもたらしたり、紛争の原因になってきた塩にまつわるエピソードを集めている。

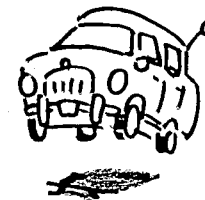


#### 《人物伝》

マララ・ユスフザイ 『わたしはマララ』 ㊦  
女の子にも教育を、と訴えてタリバンに銃撃される。一命を取り留め、国連本部で演説。17歳でノーベル平和賞受賞。そんな普通ではない少女の、普通でない人生と普通の生活とを語った自伝。

福沢 諭吉 『福翁自伝』 ㊦㊧  
福沢諭吉の自伝です。口述筆記がもとになっているので明治時代の書物にしては読みやすく、かつ大変面白い内容になっています。適塾で蘭法医学を学んだ、大坂での学生時代の乱暴狼藉ぶりは特に愉快です。

塩野 七生 『わが友マキアヴェッリ』 ㊦㊧㊨  
イタリア史に興味のある人もない人も読んでみてください。当時の権力者と渡り合い『君主論』を著したマキアヴェッリの人間性。冷徹といわれた彼がルネサンス崩壊を冷静に暖かく見つめた人であったこと。また、政治とは何か。考えさせられる一冊です。



#### 《政治・経済・国際》

小熊 英二 『増補改訂 日本という国』 ㊦  
日本という国の有り様を考えるために、明治と戦後の歴史をたどり直す。すると今の日本の仕組みが見えてきて、どうしてこうなったのかが理解できる。(早ければ)小学生からも読める入門書です。

アレクサンダー・ネルソン 『ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか』 ㊦  
ベトナム戦争で多くの人を殺した帰還兵が語る、戦争の現実。軍隊の訓練とはどんなものか？ 殺した敵の死体はどうするのか？ 戦争のにおいや音は？ 「ほんとうの戦争」とは何かを伝える一冊。

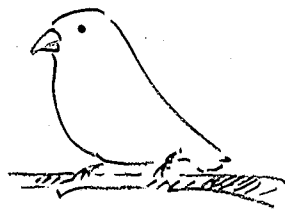
竹信 三恵子 『ピケティ入門』 ㊦  
「経済的不平等」の専門家であるトマ・ピケティの理論をわかりやすく解説した本です。現代において世界が抱える経済格差の問題と、今後の世界の流れを把握する際の入門書となるでしょう。

鶴見 良行 『バナナと日本人 フィリピン農園と食卓のあいだ』 ㊦㊦  
スーパーにあふれるフィリピン産の安くて甘いバナナも、ひと皮むけば、そこには多国籍企業の暗躍、農園労働者の貧苦、さらに明治以来の日本と東南アジアの歪んだ関係が鮮やかに浮かび上がる。

ライシャワー、國弘 正雄 『The Meaning of Internationalization  
真の国際化とは (バイリンガル版)』 ㊦㊦  
約25年前に、高校の英語の授業で本書(洋書)が使われました。25年もたっているのに、今の日本の若者にもとても勉強になる内容です。バイリンガル版は左ページに英語、右ページに日本語が書かれていて、見開き対訳になっています。英語の勉強として、英語のページを読むこともできるし、わからない箇所は日本語を読むこともできます。

村井 吉敬 『エビと日本人Ⅱ 暮らしのなかのグローバル化』 ㊦㊦㊦

家庭でエビを食べるとき、東南アジアの養殖池の日雇い労働者や一日中背ワタとりをする少女たちのことは考えない。日本の消費者とアジアの生産者に、どんな関係が切り結ばれるべきだろうか？



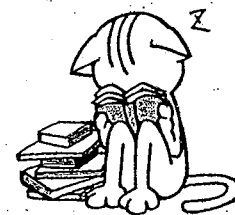
## 《法学・文化・社会》

柴田 元幸訳 『現代語訳でよむ日本の憲法』 ㊦  
憲法の条文は法律特有の表現で書かれているが、英語で書かれた正文も存在する。これを、優れた翻訳書を多数出している米文学者が訳した本。第9条は「正義と秩序にもとづく国際平和を心から希って、日本の人びとは永久に戦争を放棄する。」と始まる。右頁には英文と語の意味が載る。

マイケル・ジーレンジガー

### 『ひきこもりの国』 ㊦㊦

日本には、「ひきこもり」の若者たちが100万人以上いると言われています。新聞社の特派員として日本に来た著者が、彼らの目を通して日本を理解することで、日本の再生への道筋を示そうと書かれたものです。



西日本新聞社 『食卓の向こう側 5 ～脳、そして心～』 ㊦  
九州の新聞社の「食卓の向こう側」という連載や講演をまとめたもの。食事を通して身体に入る化学物質との接し方が、脳や心にどう影響するのか。私たちの「食」をめぐる状況について、様々な問題提起がなされています。

レイチェル・カーソン 『沈黙の春』 ㊦㊦  
1950年代に化学物質による環境汚染を告発した画期的な書物。汚染物質に違いはあるが、彼女が描いた「死」の世界は局所的には世界の各地で現実のものとなった。環境問題を考える上で必読。

J・ダイヤモンド 『銃・病原菌・鉄』 ㊦㊦㊦  
人類はなぜ五つの大陸で異なる発展の道を行ってきたのか。“旧大陸”の白人が“新大陸”を征服し、その逆でなかったのは、民族の優劣からではない。その謎を壮大なスケールの時間と空間の間に探る。

高橋 邦典 『「あの日」のこと 東日本大震災 2011・3・11』 ㊦  
前触れもなく突然襲った地震と津波は、人々に何の心の準備をも与えることなく、家族や家を奪っていきました。「あの日」を忘れないために。被災者の写真と生の声で作られた写真集です。

大江 健三郎 『「自分の木」の下で』 ㊦  
難解な文体で知られる作家が、平易な文章でもって、若い学生に向けてご自身の経験からくる貴重な人生観を語っています。夫人のゆかりさんの柔らかい挿絵とともに、ゆっくりと心の中に染み込ませることができます。

サイモン・シン、エツアート・エルンスト 『代替医療解剖』 ㊦㊦  
代替医療とはどのようなものか。効果があるのか。危険はないのか。それらの疑問に誠意を持って答えようとした書物。圧倒的なデータの裏付けから、インチキ医療でお金を失おうとする人への警告となっている。

《数学・物理・化学・生物・天文》

エンツェンスベルガー 『数の悪魔』 ㊦  
数学嫌いの少年の夢の中に現れた悪魔が行う授業。けれど怖い数学を怖くなくする悪魔先生の杖の一振り、数の法則が目からウロコでぼろりとわかる、詩人の書いた数学の本。カラー挿絵多数。

春日 真人 『100年の難問はなぜ解けたのか 天才数学者の光と影』 ㊦㊦  
1世紀間にわたり幾多の挑戦を退け続けた超難問〈ポアンカレ予想〉を解きながら、失踪した数学者ペレリマンの数奇な半生と、数学者たちを悩ませた難問の実像に迫る。

長澤 光晴 『面白いほどよくわかる物理』 ㊦  
我々の生活の周りには何故と思う物理現象がたくさんあります。それを面白く、丁寧に解説されています。

竹内 均 『物理学はこうして創られた』 ㊦㊦  
高校で習う古典物理を始め、近代、現代の物理学の歴史について、人物を中心にわかりやすく丁寧に書かれており、楽しく読めると思います。

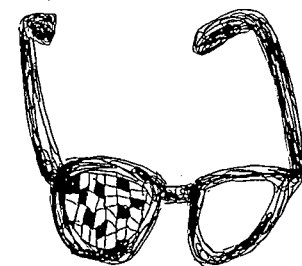
R・P・クリース、C・C・マン 『素粒子物理学をつくった人びと』 ㊦㊦㊦  
素粒子物理学の曙から20世紀末までの物理学者の物語。人間物語として描いているので、物理学を知らなくても読める。読んだ後は少し素粒子物理学について知っている気にさせてくれる。

寄藤 文平 『元素生活』 ㊦  
「元素＝化学」？ いいえ、「元素＝生活」なのです！ 生活物資にミネラル……私たちは多くの元素に囲まれて生活しています。授業では知れない(?!)「水兵、リーベ」の世界を覗いてみませんか？

日本化学会 『化学・意表を突かれる身近な疑問』 ㊦  
日常生活において物質にかかわる身近な題材を取り上げていて、化学の視点でわかりやすく解説されており、化学に興味をわく書籍。

船山 信次 『毒 青酸カリからギンナンまで』

㊦㊦  
化学物質をその作用によって、人は「毒」「薬」として使い分けてきた。この本は人の歴史の中で毒がどのように使われてきたのか、どのような作用があるのかをわかりやすく紹介している。



日高 敏隆 『世界を、こんなふうに見てごらん』 ㊦  
前書きの一節より。「この本を、これからの少年少女と大人に贈る。人間や動物を見るときにのぼくなりヒントをまとめたものだ。生きているとはどういうことか。豊かな見方をするといいと思う。」著名な動物学者の本です。

福岡 伸一 『生物と無生物のあいだ』 ㊦㊧  
生命とは、体の中を流れてゆく分子の淀みである。「生命とは何か」という問いに、最先端の分子生物学者が出した答えがこれ。眼からウロコの科学書というにとどまらず、叙情的な文章がまた見事です。

コンラート・ローレンツ 『ソロモンの指環 動物行動学入門』 ㊦㊧  
誕生したばかりのひな鳥は、最初に見た動くものを親と誤ってついていく。この〈刷り込み〉現象は有名になりました。発見者ローレンツ博士が、けものや鳥、魚の生態を、ユーモアと愛を込めて描きます。

青野 由利 『宇宙はこう考えられている』 ㊦  
宇宙はどのように始まり、どのようにできているか、そして今後どうなるのか。宇宙についてのあれこれを、現在の科学はどう考えているか、平易に語ってくれている。科学者たちのエピソードも織り込まれた、楽しい1冊。

松井 孝典 『宇宙誌』 ㊦㊧㊨  
20世紀、人類は宇宙への扉を開いた。この宇宙へのアプローチこそが現代自然科学発展の原動力であったとする観点から、20世紀科学を概説する。記述は宇宙から、生物学と自然科学全般にわたる。

《美術・音楽・スポーツ》

宮下 規久朗 『モチーフで読む美術史』

㊦

絵に描かれている物(モチーフ)を通して、古今東西の名画を鑑賞する本です。犬・豚から、月に星、最後は夢まで、文庫版ながら多数のカラー図版を掲載、2ページの文章が絵の見方を教えてくれます。



小澤 征爾 『ボクの音楽武者修行』 ㊦  
今や世界のマエストロOZAWAが、若き日々にはスクーターでヨーロッパ一人旅に出たときの、痛快無比の体験記。なんとも初々しい文体で書かれた本書は、若い君たちに読んでもらいたい。

茂木 大輔 『オーケストラは素敵だ』

㊦

たった一つしかない空席をめぐり五次審査まであるオーディションを勝ち抜いて、やっとプロオーケストラの一員となった、オーボエ奏者の筆者。そこから始まる武者修行を楽屋裏話とともに。



中村 紘子 『ピアニストという蛮族がいる』 ㊦㊧

名ピアニストたちの奇行・奇癖、日本の先駆的な女流ピアニスト師弟の悲劇、そして努力しないで上達する方法を述べた書物の紹介まで。ピアノと、ピアノ曲と、ピアニストを愛する人必読の本。

長谷部 誠 『心を整える 勝利をたぐり寄せるための56の習慣』 ㊦

サッカーワールドカップで日本代表のキャプテンを務めた長谷部選手の「心の整え方」「ゲームへ臨む準備」「プロ意識」などなど。学ぶべきことがたくさんあり、自分の生き方にヒントを与えてくれること間違いなし。

《日本語・英語》

中村 明 『名文』 ㊦㊧

名文とはどんなもの? 悪文と駄文の違いは? 多彩な作家50人の文章を精緻に分析し、名文のスタイルの構造を解析。必読の現代文章読本です。

講談社インターナショナル編

『これを英語で言えますか?—学校で教えてくれない身近な英単語』 ㊦  
難しい単語を覚えている割には意外に知らない身近な英語……。挨拶や馴染みのある数式、日用品から日本文化の簡単な紹介に至るまで、様々な分野の英語表現が学べる英語入門書のベストセラー。

今井 宏 『今度こそ「英語は、大丈夫。』』 ㊦  
「イマイチ」を「得意」に変える英語学習法A to Z。受験生を知りつくした予備校界のトップ講師が「ダメになる」原因を徹底解明。キミにもう一度「英語は大丈夫」と言わせる方法論を示します。

大西 泰斗、ポール・マクベイ 『ハートで感じる英文法』 ㊦㊦  
今までの文法解説で、なにかしっくり理解できなかった方、ぜひ読んでみてください。言葉である英語の奥にある思いや感情からひもといて、解説してもらえます。DVDもあわせて見ると、より理解が深まります。

多田 正行 『思考訓練の場としての英文解釈 2』 ㊦㊦㊦  
ペラペラしゃべることが英語の本質でないことをこの本は物語っている。英語を一つの建築物にたとえ、その構造を寸分の狂いなく解析していくその手際はまさしく名人芸である。“紋切り型の敗北”など、類書にない視点を初めて導入した炯眼は今でも色褪せない。

中原 道喜 『誤訳の典型』 ㊦㊦㊦  
小説をメインにした翻訳の誤訳を収集、分類、整理したのが本書。私たち教師が読んで目からウロコの解説が秀逸。英語が好きで、ワンランク上を目指す向上心溢れる人には格好の書と言える。

《古典文学・詩》

清川 妙 『乙女の古典』 ㊦  
夫を愛する余り激しい嫉妬を燃やす『古事記』の磐姫から、亡霊になって

も帰らぬ夫を待つ『雨月物語』の宮木まで、恋に生き、愛に溺れる10人の女性たちを、現代文で紹介する。章ごとに紙の色が変わるのもオシャレ。

『竹取物語』ビギナーズ・クラシックス版 ㊦㊦  
短い節ごとに、現代語訳・原文・鑑賞文とコラムの順に並んでいるので、辞書や文法書いらずにかぐや姫のお話が全部読めます。古文の学習も慣れが一番。原文を声に出して読むとなおよろしい。

山本 淳子 『源氏物語の時代 一条天皇と后たちのものがたり』 ㊦㊦㊦  
紫式部や清少納言が女房として仕えた平安中期、貴族たちはどんな生活をしていたのか、どんな政治的事件が官中を舞台に起こったのか。源氏だけでなく『大鏡』を読むにも、歴史を学ぶにも、面白く迫ってきます。

金子 みすゞ 『童謡集 美しい町』 ㊦  
「朝焼小焼だ／大漁だ／大羽鰯(おおばいわし)の／大漁だ」「海のなかでは／何万の／鰯のとむらい／するだろう」。26歳で亡くなった童謡詩人は、3冊のノートに作品を清書していました。その1冊目の全作品です。

俵 万智 『サラダ記念日』 ㊦  
〈「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人の いるあたたかさ〉(『サラダ記念日』より) 何気ない毎日の何気ない日常を、温かくそして美しい言葉で切り取った、現代を代表する歌集です。

谷川 俊太郎 『自選 谷川俊太郎詩集』 ㊦㊦  
本をめくる手がとまらなくなるとはよく聞かすが、この谷川俊太郎の詩集は手をとめて、一つ一つの詩をしっかりと考えたい作品ばかりだ。中でも「二十億年の孤独」は是非読んでもらいたい。

茨木 のり子 『詩のこころを読む』 ㊦㊦  
いい詩にはこころを解き放つ力があります。詩人の著者が、こころを豊かにしてくれた詩の魅力に情熱を込めて語っています。詩の入門にどうぞ。

《小説・童話》

井上 ひさし 『ナイン』

㊦

少年野球チームのメンバーそれぞれに20年後に待ち受けていた人生は？ 10ページほどの短編が、心を温め、泣かせてくれます。そんな小説が全部で16編。あなたには、どれが最も心に染みますか？

山田 詠美 『ぼくは勉強ができない』

㊦

本当に頭がいいとはどういうことなのでしょうか？ 学校の勉強が〈できる〉ことなのか、社会の中で〈できる〉ことなのか。考えさせる小説です。

川端 康成 『伊豆の踊子』

㊦

二十歳の学生が伊豆半島を北から南へ一人旅する青春小説です。自然と感情の一体となった繊細な表現にしばれてみてください。

宮沢 賢治 『銀河鉄道の夜 ほか』

㊦

小さな物語の幾篇かが与える透き通るようなところ。どの一編からも賢治の愛してやまない岩手県の風景が浮かんでくるようです。

万城目 学 『プリンセス・トヨトミ』

㊦

誰も決して口には出さないけれど、大阪人が長年ずっと大切に守り続けてきたあの秘密に、会計検査院の手が伸びたとき、幻の「大阪国」指令が発動する。都市機能を全停止した大阪の今後の運命は？

三浦 しをん 『舟を編む』

㊦

出版社の営業社員・馬締光也は、言葉への鋭いセンスを買われ、辞書編集部に引き抜かれた。新しい辞書『大渡海』の完成へ向け、彼と編集部まじめの面々の長い長い旅が始まる。個性あふれる不器用な人々の思いが胸を打つ、本屋大賞受賞作。

佐藤 多佳子 『一瞬の風になれ』

㊦

一瞬にかける陸上部を描いた青春小説です。登場人物が感じる風を、読者まで感じることができるような描写が秀逸です。皆さんが高校で経験する悩みや葛藤、そして達成したときの喜びを、リアルに表現しています。

田辺 聖子 『新源氏物語』

㊦㊦

源氏物語の翻案小説。逐語訳とは違い、主人公源氏をより大きな位置に配し、わかりやすくとらえられます。源氏物語をエピソード群ではなく、一つの物語として、小説として楽しめます。

重松 清 『流星ワゴン』

㊦㊦

人生の分岐点をやり直せるとしたら……。そしてその分岐点において自分と同年の「父親」がいたら……。累計発行部数百万部を越え、テレビドラマ化もされた重松清の代表作です。

上橋 菜穂子 『鹿の王』

㊦㊦

『精霊の守り人』『獣の奏者』の作者の最新長編。奴隷に落とされたヴァンは、幼子を拾い育てるが、不思議な犬との出会いから身体に異変が起こる。謎の病を通して、父と子の絆、生きることを問う、異世界サスペンス。

小川 洋子 『博士の愛した数式』

㊦㊦

《博士》の記憶は80分しかもたない。だから家政婦の《私》は、博士にとってはいつも初対面の人。博士は数学者。私の息子を《ルート》と呼んだ。二人のぎこちない付き合いが始まった。悲しくて暖かい、愛の物語。

川上 弘美 『ニシノユキヒコの恋と冒険』

㊦㊦

完璧だけど、なんだか残念。女性を惹きつけてやまない男、ニシノユキヒコ。彼を好きになった女性の目から語られる短編集。少し切ない余韻が残る一冊。2014年に映画化。



奥泉 光 『シューマンの指』 ㊦㊧  
右手中指の第二関節(シューマンも故障をしてピアニストを断念した)を  
失った天才ピアニスト、長嶺修人の演奏を聴いたという手紙から物語は  
始まる。シューマンに魅せられたピアニストの卵たちの青春物語。

村上 春樹 『海辺のカフカ』 ㊦㊧  
父から与えられた“呪い”から逃れるため家出した少年の話と、猫探しの  
老人の話が一つになるとき、〈入り口の石〉の謎は解けるのか？ 読者も  
共に不思議な世界に誘われる、世界的作家ハルキ・ムラカミの代表作。

織田 作之助 『夫婦善哉・木の都』 ㊦㊧  
旧制高津中学の生徒《私》は、口縄坂にあった夕陽丘女学校の校門から  
「坂を上って来る制服のひとを見て、夕陽を浴びたようにぱっとあかくなっ  
た」(「木の都」)。戦前の大阪庶民を描くオダサクの世界。

司馬 遼太郎 『項羽と劉邦』 ㊦㊧  
戦国から秦へ、その秦も2代で滅び、時代は次の英雄の登場を待ってい  
た。天下を握るのは項羽か劉邦か。漢文「鴻門の会」でも有名な両雄の  
人間性を深く掘り下げて描く、一大中国歴史絵巻。

中島 敦 『李陵・名人伝』 ㊦㊧  
時の権力者・武帝に翻弄される李陵と司馬遷の生きざまを描いた「李  
陵」、弓の名人・紀昌が達した〈不射の射〉の玄妙さを描く「名人伝」、孔  
子の弟子・子路を描いた「弟子」を収める短編集。

太宰 治 『晩年』 ㊦㊧  
27歳の太宰治は、書きためた短編小説をまとめ、『晩年』と題して自費出  
版した。「私はこの一冊のために十箇年を棒に振った」と書いて。後年の  
彼の様々な顔は、この第一作品集にすべて現れている。

夏目 漱石 『こころ』 ㊦㊧  
お嬢さんをめぐって、親友のKと争う《私》。恋には勝ったが人間として負  
けた私が、《先生》と慕ってくる学生に宛てた長い遺書で伝えたかったこ  
とは何か？ 2年現代文の教科書でだけでなく、全文を読んでみよう。

小林 多喜二 『蟹工船』 ㊦㊧  
極寒の海で、人間扱いされず酷使される労働者が仲間の死をきっかけに  
団結し、立ち上がる。ワーキングプアが増加している現在、再び注目を浴  
びる。斬新な表現としても成功した作品。

樋口 一葉 『たけくらべ』 ㊦㊧  
明治の少年少女の淡い恋物語。流れるように美しい文語文で書かれた  
名作が、現代語訳が一節ごとに先についているこの角川文庫版でなら、  
分かる！ 声に出して読んだら、なお味わいが深まる！

遠藤 周作 『深い河(ディープ・リバー)』 ㊦㊧㊨  
インド(ガンジス河)に行きたくなる小説です。宗教・人生について深く感  
じ取ることができます。

安部 公房 『砂の女』 ㊦㊧㊨  
昆虫採集に出かけた男は、砂丘の穴底  
の家に住む女に囚えられる。逃げよう  
としても逃げられない、砂の穴……。前衛  
的でいて物語性に富み、非現実でいて  
リアル、芸術的でいて読みやすい現代小説の傑作。



谷崎 潤一郎 『春琴抄』 ㊦㊧㊨  
盲目で美貌の三味線師匠・春琴に仕える佐助は、師が何者かによって  
顔に火傷を負わされると、脳裏にその面影をとどめるため自らの目を針  
で突き、ますます献身的に尽くし……。古き大阪での異様な愛の世界。

芥川 龍之介 『河童』 ㊦㊧㊨  
カッパの国にまぎれこんで戻ってきた男の語る、その世界は？ 子どもは母親のお腹にいる時、産まれたいかどうか尋ねられる。恋した女が男を追いかける。他にも驚きの河童社会。あなたも迷い込んでみたら。

《ノンフィクション・紀行・評論》

藤原 てい 『流れる星は生きている』 ㊩  
第二次大戦終結。気象台勤務の夫と引き裂かれた著者の、満州からの脱出行が始まる。幼い三人の子を連れての。戦争がもたらす惨劇と、女性＝母のもつ強さが胸に迫ってくる。

アンネ・フランク 『アンネの日記』 ㊪  
誰でも題名は知っている本。ナチス支配下のオランダで、探索の目を逃れて隠れ住むユダヤ人一家の記録。そんな面だけでなく、男の子への関心など、感受性豊かな少女の成長記としても読めます。

沢木 耕太郎 『深夜特急』 ㊫  
インドのデリーからロンドンまで、路線バスを乗り継いで行ってみる。そんな計画を立てた若者が《私》。しかし日本を出発してから半年になるのに、まだデリーにいる。途中の香港やマカオが面白すぎたのだ。この長い旅行記を読み出した読者にとっても、そうだ。旅はまだまだ続く。

小田 実 『何でも見てやろう』 ㊬㊭  
海外がはるか遠かった1958年、一人の夕陽丘高校出身の青年がフルブライト留学生としてアメリカへ渡った。食欲に、あるがままに世界を見てまわった、一日一ドルの旅行記は当時多くの若者を旅に誘った。

石牟礼 道子 『苦海浄土 わが水俣病』 ㊮㊯㊰  
熊本県水俣市を中心に発生した奇病。工場排水に含まれる水銀化合物

が魚や貝に蓄積され、それを食べた人たちが発症した。その患者たちの心の声を聴き、書き留めた本書は文学作品としても高く評価されている。

《外国文学》

モンゴメリ 『赤毛のアン』 ㊱  
この《幸福》ではちきれそうな物語は、夕陽丘創立(1906年)の翌々年に出版され、すぐに世界的ベストセラーになりました。ところが日本語訳され爆発的に読まれるようになったのは、その40年後の戦後のことでした。朝ドラ「花子とアン」のモデル村岡花子の訳です。集英社文庫版もお薦め。

J. K. ローリング 『ハリー・ポッターと死の秘宝』 ㊲  
10年をかけて原作が出版されたシリーズは、日本語訳も2008年に完結しました。これがその最終刊。いったい作者はこのシリーズによって何を言おうとしたのか。単なるエンタテインメントなのか。それとも？

リチャード・バック 『かもめのジョナサン 完成版』 ㊳  
〈飛ぶ喜び〉〈生きる喜び〉を追い求め、自分の限界を突破しようとしたジョナサン。群れから追放された彼は、精神世界の重要さに気づき、見出した真実を仲間伝える。しかし、彼が姿を消した後…(文庫裏表紙より)

フランツ・カフカ 『変身』 ㊴  
ある朝目覚めると自分が「虫」になっていたら？ という文字通り〈変身〉を描いた作品。発表以来、哲学的な読みがなされてきたが、ブラックユーモアの作品というのが真相らしい。

マーガレット・ミッチェル 『風と共に去りぬ』 ㊵㊶  
アメリカ南北戦争を背景に、美貌の主人公スカーレット・オハラが波乱に富んだ人生が描かれています。彼女のたくましい生きざまに勇気づけられます。新しい翻訳が今年、新潮文庫と岩波文庫で出ました。

ヘルマン・ヘッセ 『車輪の下』

㊦㊦

自然児で傷つきやすい少年ハンスは、周囲の大人達の期待にこたえ勉強にうちこみ神学校へ。しかしそこでは少年の心を踏みじめる生活が…。反抗し傷つき疲弊し神経衰弱に陥っていく。ヘッセの代表的自伝小説。

ヴィクトル・ユゴー 『レ・ミゼラブル』

㊦㊦

ミュージカル版は映画にもなり、多くの観客を感動させました。5部からなる原作はさらに長大です。ジャン＝バルジャンの登場までに100頁近く費やして、ミリエル司教について詳しく語られたりするためですが、そこに味わいもあります。

Saint-Exupery サン＝テグジュペリ

翻訳㊦ 原文㊦㊦

『The Little Prince 星の王子様』(英語版)

子ども向けのお話だが、「大切なものは目には見えない」というメッセージが込められた、心温まる本である。自分にとって「本当に大切なもの」は何かを考えるきっかけになる一冊。

D.Salinger サリンジャー

翻訳㊦ 原文㊦㊦㊦

『The Catcher in the Rye ライ麦畑でつかまえて』

人生には若い時にしかできないことがあります。そして若い時にこそ読んでおくべき本があります。本書は高校を退学になった主人公が、「自分とは何か」という答えを挫折を繰り返しながら見つけ出そうとする物語です。共感できる部分も、訳のわからない部分もあると思いますが、今この時には是非読んでほしい一冊です。

ドストエフスキー 『罪と罰』

㊦㊦㊦

貧しい大学生が近所の強欲な高利貸しの老婆を殺す。その財産を有効に使い、社会に役立てるために。しかし予期していなかった事態が起こり……。世界名作文学の中でも屈指の傑作は、犯罪小説としても面白い。

## 《番外20編 軽い読み物・読みやすく楽しめる小説》

西村 淳 『面白南極料理人』

調理担当の南極越冬隊員が-80℃のドーム基地で活動した実話。ストレスだらけの基地活動、料理話だけでなく、隊員の人間関係の部分も面白い。

柳田 理科雄 『空想科学読本 1』

ゴジラ2万トン、ガメラ80トン、科学的に適切な体重はどちらか？ に始まって、特撮やアニメの怪獣・ヒーローの設定や技に、科学的なメスを入れる。バカバカしいこと、どうでもよさそうなことを真面目に考える面白さ。

早川 いくを 文、寺西晃 絵 『へんないきもの』

題名どおりの変な生き物が、次々と紹介されます。軽～いノリの文章と、珍妙な姿かたちをした動物のイラストが見開きごとに展開。架空の生物と思いきや、いるんだって、本当に。笑える本です。

中村 計 『甲子園が割れた日』

1992年夏の甲子園。星陵の松井秀喜に対し、明德義塾は敬遠四球作戦に出た。それから15年。かつての球児や監督はどんな思いでいるのか。

デイヴ・ペルザー 『<sup>それ</sup>“It”と呼ばれた子』

児童虐待。本書はその被害者による体験記。当事者ゆえに一面的であつたり誇張が混じっているかもしれないが、母親のすさまじい暴力と、それに耐えて生きる姿は、“人間”について考えさせられる。

海堂 尊 『医学のたまご』

僕は曾根崎薫、14歳。普通の中学生の僕が“日本一の天才少年”とされ東城大学医学部で研究をすることに！「世界は呪文と魔方陣からできている」など、薫の父がメールで毎回書いてくる格言も面白い。

森 絵都 『カラフル』

「おめでとうございます、抽選にあたりました！」死んだ魂である〈ぼく〉が天使に言われ、自殺した少年・真の体を借りてもう一度人生をやり直すチャンスを与えられる。ファンタジーの中にもしっかりとしたメッセージが詰まった本。

### 有川 浩 『図書館戦争』

大人気の、恋と戦争とギャグのエンタテインメント。けど、有りがちなそれだけでなく、この小説、図書館の自由を守る、なんてテーマもくつついてて、軟派なようで、けっこう芯が通ってる。

### 三上 延 『ビブリア古書堂の事件手帖』

本を読むとすぐ眠くなる古本屋の店員と、美人の店主。二人のじれったい恋の進行と共に、本にまつわる謎が解決され、店主の母親に関する謎がますます深まっていく、というライトノベルシリーズ、第一巻。

### 越谷 オサム 『陽だまりの彼女』

美人になった幼友達と再会した〈僕〉の恋は、ページ数全体の $\frac{1}{2}$ ほどで叶って、ハッピーな結婚生活に。しかしこれだけで終わっては小説にならない。さてさてどう展開するか？ 伏線の回収も見事な結末は、涙涙です。

### 森見 登美彦 『有頂天家族』

京都は糺の森に住む狸の名門下鴨家の父は、狸鍋にされ帰らぬ狸となってしまった。遺された息子たち〈下鴨四兄弟〉の三男で、面白く生きるがモットーの矢三郎とそれを取り巻く狸と天狗と人間たちの物語。

### 市川 拓司 『そのときは彼によろしく』

「誕生日が苦痛？ 楽しくない？」みなさんは誕生日の日についてどのように考えますか？ そんな“当たり前にあること”について考えさせられる作品です。心で考える言葉を探してみませんか？

### 菅田 哲也 『武士道シックスティーン』

退屈な高校生活を送っている人は、これ読んで感動してさっさと部活でも始めなさい。字読むのめんどくさいならコミックもある。それもいやなら映画もある。気に入ったなら続編もある。

### 浅田 次郎 『壬生義士伝』

新撰組隊士の中ではあまり有名ではない吉村貫一郎が主人公の歴史小説です。新撰組の剣術師範でありながら性格は温厚で、家族のために命と金にこだわる吉村貫一郎の生き様は、読む者の胸を打ちます。

### 北村 薫 『空飛ぶ馬』

日常にひそむささいだけれど不思議な謎。それをスルーしてしまわないで考える女学生の〈私〉。ヒントを与えてくれるのは落語家の春桜亭円紫師匠。シリーズ化され、読者も一緒に〈私〉の成長をたどっていきけるミステリー。



### アガサ・クリスティー 『そして誰もいなくなった』

誰もが題名を聞いたことのある、ミステリー史上の傑作。まだ読んでない人は幸運です。あの衝撃をこれから体験できるから。一度読んだ人も幸いです。自分がどこで騙されたか、確かめながら読めるから。

### 江國 香織 『思いわずらうことなく愉しく生きよ』

「人はみないずれ死ぬのだから、そしてそれがいつなのかかわからないのだから、思いわずらうことなく愉しく生きよ」という犬山家の家訓。それぞれのやり方で家訓に従う個性あふれる三姉妹の物語。

### 伊坂 幸太郎 『ゴールデンスランバー』

青柳雅春はある日突然首相暗殺の犯人に仕立て上げられる。様々な人の助けを借り、逃走を重ねる青柳。絶体絶命の場面で問われる人としての資質は何か。息も止まらぬ展開に、ページを繰る手が止まらない。

### 東野 圭吾 『手紙』

強盗殺人の罪で服役中の兄から、月に一度弟に送られる手紙。殺人犯の家族というレッテルに苦しみ、人生の幸福がすり抜けていく弟。犯罪加害者の家族に及ぶ悲しい現実が描かれた感動の一冊。

### 恩田 陸 『夜のピクニック』

全校生徒が一昼夜かけて80キロを歩く学校行事に参加する、高校三年生たちを描いた青春小説です。気の合う大事な友人と、最後の行事をともに過ごすことの意味を感じ取ってください。